

「生きた建築」でつくられた都市・大阪

嘉名 光市

まちの価値とは、どのようにしてつくられるのか。もちろん、歴史・文化、経済、観光、暮らしやすさ、安全など様々な視点があるだろう。しかし、どんなに素晴らしい価値があっても、それが都市に暮らし、都市を訪れる人々の知るところにあり、手の届くところになれば、そのまちは「生きている」価値を持っているとは言えない。近年、景観の分野では生活景という概念が注目されるようになってきている。どんなに美しく整った意匠をしても、その風景の中に生き生きとした人々の活動がなければ、その景観は躍動感を持たない。つまり、生きていることを価値として評価しようとする動きが進んでいる。単に見た目としての問題ではなく、場所が人々に愛され、使われていること、つまり「生きている」ことが大事なのだ。同じように、都市デザインの領域でもこうした考えは広がっている。スペースデザインからプレイスメイキングへとその流れは転換をみせている。すなわち、様々なまちの資源が「生きている」ことが現役のまちにはとても大切になる。どんなに美しく、どんなに優れていても、我々が暮らす現役のまちは、博物館のショーケースに収蔵されているわけではない。

大阪という都市はじつに多様だ。歴史都市、経済産業都市、城下町、門前町としての顔もあり、その面影や足跡がそれぞれまちにちゃんと残されている。そう、この都市の大きな魅力は幾多の時代を経てなお、いまもなお現役でまちを使いこなしていることにある。つまり、いまも「生きている」ことにある。

そういうまちだからこそ、建築の新しい価値を提示できるのではないか。大阪というまちの魅力を建築という価値を通じて再発見できないか。そんな思いから、「生きた建築ミュージアム」の試みは始まっている。

都市・大阪にひろがるまちに積層してきた時間は、町衆のアクティブな活動とともに建築など様々な構築物を生み出し、それらがまちの個性をかたちづくってきた。生きた建築を知ることは、過去を知り、それに通じる現代を知り、そして未来をつくることにつながる。その継起的な視座が大阪らしさであろう。

「生きている」ことを大切にするまちの個性を「生きた建築」の誕生から知り、その使いこなしを体感する。「生きた建築」に流れた時間の読み解きによってその価値を再評価する。そんな建築の見方、まちの見方から、大阪を捉えてみたい。